

出会いはタカラモノ

子どもから教えられたことばかり

第10回 仲間とつながり人生をつなぐ院内学級



佐藤比呂二

さとう ひろし／東京都生まれ。特別支援学校教員。編著書に『ホントのねがいをつかむ―自閉症児を育む実践』（全障研出版部）など。

格差の大きい病弱教育の場

一口に「院内学級」と言っても、病院や学校によって教育条件の質と量には大きな格差があります。特に、高校生のための院内学級は圧倒的に不足している上、編入するにしても地元校を退学しなければならないという高いハードルがあります。オンラインで入院中も授業を受けられる高校が開始されましたがとても足りるものではありません。

地元校からは「病院の中で十分な学習ができるのか。まずは治療に専念して」という疑問や心配の声も聞かれます。しかし、きびしい治療に向き合わざるを得ない毎日だからこそ院内学級は必要なのです。

国立がんセンターにあるいるか分教室（以下、いるか）は高校生の受け入れができる全国でも数少ない場です。普通科のほぼすべての科目を履修でき、個々に合わせた教育課程を

組むことができます。地元校の教科書を使い進捗もできる限り合わせます。私は、期末テストは一人ひとりの課題に合わせ10人いれば10通り作りました。

ただ、体調の悪さや治療により予定通り授業が進まずあせりを感じたり、できない自分を責めて気持ちが不安定になることもあります。そんなときこそ「何があっても大丈夫」と寄り添い、「たとえ遅れても大丈夫。いつからでもやり直せる」と伝えたいのです。

「わかるおもころね」がやる気の源

一年間にわたる闘病生活を終え、高2の2学期からの復学が決まった匠太郎君。治療や手術などもあり、実際に受けられた授業時数は地元校にはとても及びません。しかし、時間は少なくともいるかの授業はわかりやすくおもしろいと集中して学びました。復学前の夏休みはすでに退院していましたが、

私と数学をやりたいと毎日いるかに通い、復学してみると、なんと入院前より成績がよく地元校の先生を驚かせました。

また、数学は苦手嫌いと言っていた友里さんが、めずらしく夜ベッドで数学の問題集を広げていたときのこと。看護師さんが「がんばってるね」と声をかけると「わかるとおもしろいからやってみようと思って」と答えたそうです。やる気になれば自ら学ぶのです。

私が数学の授業で心がけるのは、その子のわかり方に応じて指導すること、そして、単なる暗記ではなく本質的な意味を伝えたいということ。授業を通して学びのおもしろさに気づいたら、子どもは授業を超えて自ら学んでいくでしょう。病弱教育ではどうしても限られる授業時数。しかし、授業の量ではなく質で乗り越えたいのです。

生きる意味を見失う

院内学級の役割というと入院中の学習保障がまず頭に浮かぶかもしれませんが。ただ、私がいるかで出会った子どもたちの多くが口を揃えるのは「大事なのは学習面より精神面の支え」です。

匠太郎君をはじめはとても勉強どころではありませんでした。それも当然です。毎日、野球に明け暮れる日々。それが突然の小児がんの発症。しかも、足にできた骨肉腫だったのです。入院当初の気持ちを後に打ち明けてくれました。

「病名を聞いた瞬間初めて感じた『死の恐怖』。医師の説明に少し安堵はしたものの、もう一生激しい運動はできないこ

とがわかったときに感じた『死ぬこととはちがうもう一つの絶望感』。こんな体になってまで生きる意味があるのかと考えるが、親より先に死ぬのは申し訳ないからそのためだけに生きるしかないと思った『妥協の人生の始まり』」

16歳の青年にとってあまりにもきびしい現実です。そんななか、治療は否応なく始まります。「治療2日目、起床と同時に嘔吐するほど体調が激変した。それ以降、常に吐き気がある状態となりお茶漬けしか食べられなくなる。5日目、朝食を8割以上食べないと点滴が取れないため、無理やり詰め込み1クール目の治療は終了した。この間、抗がん剤の想像以上のつらさにベッドから立ち上がることもすらできない状態となっていた。吐き気止めの薬を使っていたにもかかわらず、今まで生きてきたなかで最高レベルの吐き気をつらさであった」

先が見えないきびしい治療。しかも、たとえ終わっても二度と野球ができない現実を前に、「ただ淡々と治療をこなす『義務感』と、なぜこんなことをしているのかという『虚無感』、そして普通の生活を送れている同級生に対する『嫉妬』」を感じていたといいます。

入院生活をプラスに変えた仲間との出会い

入院してしばらくしたある日、匠太郎君がぼつりとつぶやきました。

「野球やるために入った高校だからさ…治療が終わってももう高校戻る意味なくなっちゃったよ」